

---

# ふくいミュージアム

1987. 3. 1

No.11

福井県立博物館

---



こん いと におい おどし どう まる  
紺糸 匂威胴丸

昭和62年春の特別展 4月25日(土)～6月5日(金)

ひきやま  
「曳山—その魅力と伝統—」

曳山は県内ではほとんどヤマと呼ばれています。嶺北の人なら三国の物を思い浮かべでしょうし、嶺南の人は敦賀や小浜の物を思い出されると思います。いずれも工芸品で美しく飾られ、みごとな人形やはやしが祭りをたいへん華やかなものにしてあります。曳山はいろいろな祭具の中で最も豪華な物で、祭りの楽しさ、華やかさを代表する物と言えるでしょう。

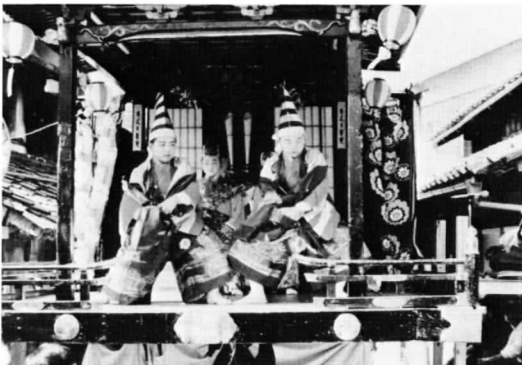
福井は曳山が特に多い所ではありません。そのためか曳山への関心も一部の人に限定されているようです。しかし少なくとも三国や敦賀、小浜の人々には大きな関心事でした。また芦原町では温泉地として繁栄するようにと昭和の初めに三国になった曳山を出すようになりました。

曳山が広い普及を見たのは江戸時代のことです。この時代、人々はなぜ祭りに曳山を取り入れたのでしょうか、また曳山とはいったい何なのでしょう？この展覧会ではこうした疑問にお答えし、曳山と町の祭りの魅力を味わっていただきたいと思います。

この展覧会は次のように構成される予定です。

**1. さまざまな意匠** 「曳山」と言っても呼び方も形も実にいろいろなものがあります。県内に限って見てもそれぞれが違った形をしており、それぞれの歴史を持っています。ここでは県内と北陸の代表的な曳山を比較して紹介します。

主な展示資料／三国上西町曳山、福井藩十二か月年中行事絵巻、松ヶ下万代不易録、拾椎雑話、高岡二番町曳山模型



**2. 曳山の性格**

曳山の本来の性格は神を招く依代だとされています。しかし各地に普及すると依代としての形をほとんど持たない物が多くなりました。神様に喜んでいただき、見物に集まる人も楽しませる性格が強くなったのです。ここでは県外の資料も含めて曳山と祭りの変化を見ることにします。

主な展示資料／播磨総社の三山神事模型、洛中洛外図屏風、大津祭り曳山からくり人形、小浜祇園祭礼図絵巻、三国上西町町内治定改方記録

**3. 曳山の魅力** 曳山が広く普及したのは他の物にない魅力があったからと言えます。曳山の魅力は華麗さ巨大さ、作り物のおもしろさ、曳行の雄大さ、はやしなどさまざまなのが考えられますが、展示では工芸品の点から見ることにします。曳山は互いに競い合う過程で美しく飾られて来ましたが、曳山の美しさは町内の人々の誇りになっていました。

主な展示資料／小浜の曳山の見送り幕、敦賀の曳山の人形と装具、新湊の曳山の車輪、三国の曳山の彫刻、小浜の神楽屋台

**4. 曳山を支える** 豪華な曳山を出すためには経済力や洗練された美意識、教養が必要です。同時に「町内」も大きな関係を持っています。曳山は町内どうしの競争によって一層魅力を増しましたが、そこには町内の協力や結束も必要です。展示ではこの点を考えます。

主な展示資料／敦賀午陽祭献立、大野の町内記録、祭り衣装、小浜の祭りの本陣



## 昭和62年 秋の特別展

## 「福井の山岳信仰展(仮称)」

福井県で山岳信仰といえば、いうまでもなく白山信仰が第一にあげられる訳ですが、その具体的な遺品となると、案外知られていない面があります。白山でさえそのような有様ですので、ましてほかの山々への信仰の遺品は、なかなか知られていないのが実情です。本年秋の特別展はこのような山岳信仰にゆかりの遺品を集めて展示したいと思います。

山岳信仰にゆかりの遺品というと、まず仏像があ

ります。現在では、例えば白山を祀るのは白山神社で、日野山を祀るのは日野神社ということになっています。しかし、もともと山の神々は本地垂迹の説により、仏が姿をかえたものとされてきましたから、仏像を安置していました。したがって、山の神々は仏教寺院で祀られていました。白山の越前馬場といわれた平泉寺はもとより、朝日町大谷寺、今立町大滝寺、丸岡町豊原寺、福井市田谷寺など白山信仰の拠点であったことが知られています。

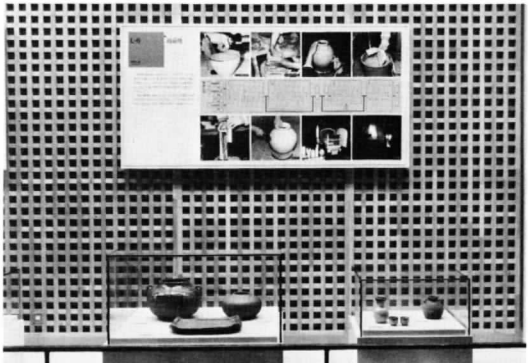
さらに、武生市の日野山、福井市の文珠山、松岡町の吉野ヶ岳、若狭の青葉山なども含めて、これらの山々にかかわる信仰の遺品について、その一端を紹介してみたいと思います。

伝統工芸コーナーに

**越前焼** が加わりました!



産業展示室の「伝統工芸一技を伝える」は、県内の伝統的工芸品を紹介するコーナーです。これまで若狭めのう細工、若狭塗、越前漆器、越前和紙、越前打刃物を展示してきましたが、昨年3月新しく越前焼が伝統的工芸品に指定されたので、12月から越前焼を加えて展示しています。



伝統的工芸品は、地域の風土、住民の生活の知恵、産業の従事者の創意工夫によってみがきあげられ、受けつがれてきたものです。機械文明の大量生産品にはない、独特の味わいやぬくもりを感じさせてくれます。



越前焼は、平安時代の終わり頃から、丹生郡の織田町や宮崎村の丘陵地一帯で焼かれてきたという歴史をもっています。長い歴史のなかで培われてきた技術や技法が現代へ受けつがれています。なかでも「輪積み」の名で知られるねじ立て成形の技法(写真上)は、粘土紐を積みあげひきのぼしていく成形の技法で、越前焼の伝統ともいえる大きな甕や壺は、すべてこの技法で作られてきました。

展示品は、現代の製品のなかから、越前焼の伝統的な技法によって作られたものを選びました。解説パネルでは工程図と写真によって、越前焼の製造工程や技法を紹介しています。

越前焼については、歴史展示室で鎌倉、室町時代の越前焼を展示していますし、ビデオライブラリーには「土と炎の歴史—越前焼—」という番組があります。あわせてご覧になって、越前焼について理解を深めていただければ幸いです。

研究ノート

越前国大虫廃寺出土  
軒丸瓦小考

1

大虫廃寺は、越前国府に比定される現在の武生市街地を東方に眺望する武生市大虫本町17字中江に所在する。1966年に、農業構造改善事業に伴い武生市教育委員会による緊急調査が行われ、方約12mにわたって塔基壇の一部が検出された。出土遺物の大半は瓦類だが、軒丸瓦・軒平瓦の概要が報告されているにすぎない<sup>(1)</sup>。筆者は最近、水野和雄氏と伴に、県下の古代寺院及び関連の生産遺跡から出土した資料の集成作業を行った<sup>(2)</sup>。その過程で、従来A～Eの5型式として認識されてきた大虫廃寺軒丸瓦の瓦当文様が、実際には瓦範は3種しかなく、そのうちの2種は文様を彫り直して使用していることが判明した。小稿では、この瓦範改作の過程を紹介し、あわせてその意味を考えていくことにより、大虫廃寺所用瓦を生産した瓦屋の具体像を探る手懸りとしたい。

2

軒丸瓦は、瓦範を同じくするものがI・II・IIIの3型式あり、前2者は文様の改作の順にI a・I b・I c、II a・II bに細分される。

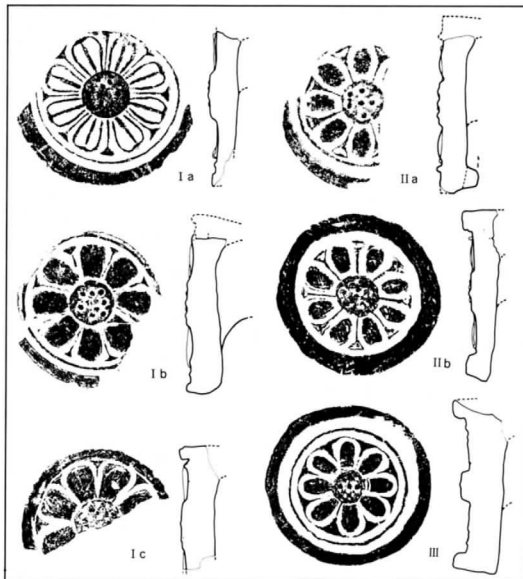


図1 大虫廃寺出土軒丸瓦 (1/8)

**軒丸瓦 I a** 素弁八葉蓮華文。花卉はその輪郭を隆起線で表わし、その中央に稜線を表現する。間弁は楔形で、花卉と共に中房に接する。中房の蓮子構成は3+7と見られるが、極めて不均等な配置をとる。外区は内側に圏線をもつ二重の直立縁である。

**軒丸瓦 I b** aの花弁部分を彫り下げて稜のない素弁にする。中房上面と花卉の高低差がaより小さく、全体的にも若干彫り下げたらしい。それと共に間弁は小型化し、中房と離れたものもある。a・b段階では、範型は周縁の途中約1cmのところまで終り、その外側は整形によるため、大半の資料の外周は整った正円をなしていない。

**軒丸瓦 I c** b段階の間弁部分を更に彫り下げ、中房と間弁は完全に分離する。楔形の部分は彫り直され、やや大型化している。外区は圏線の部分を外側に約1cm幅で彫り広げ、これを周縁としている(図2)。資料の周縁外側には、範型の拡張した部分の外側のラインが明瞭に残っている。

**軒丸瓦 II a** 素弁八葉蓮華文。間弁は強調気味に表現され、中房に接する。蓮子は1+5の配置をとり、範傷を認める。範型の外区は、I a・bと同じ形状の圏線をもつ直立縁だったと思われるが、粘土を範型からはずした後に、周縁部分を削り取って平縁に仕上げている点に注意される(図2)。なお、II型式ではa段階に限って、中房付近に粘土をつめた際の不連続面が明瞭に認められる。a・b両段階では、別の工人がこの瓦範を使用したようである。

**軒丸瓦 II b** aの圏線部分から外側をI型式と同じように彫り広げ、周縁とする。但し、b段階資料の周縁上面の内側から約1.2cmのところに範型の端のラインが認められるので、周縁部拡張後に、周縁内側の立ち上がりから幅1.2cmの箇所を範型をカットしたものと考えられる。

**軒丸瓦 III** 素弁八葉蓮華文。花卉は盛り上がり極めて薄く、弁端は丸い。間弁は各々が接続し、花卉をとり囲む。突出した中房には1+4の蓮子を配す

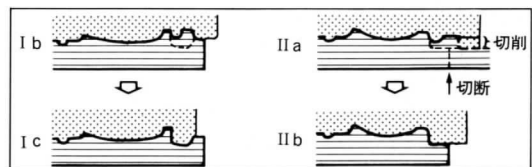


図2 瓦範外区彫り直し模式図

る。外区は、おそらく既に堂舎の軒先に葺かれていたであろう I a・b を模倣したと考えられる、圏線をもつ直立縁であるが、周縁は著しく高い。

3

**時期の問題** 前節で述べたとうり、軒丸瓦 I : a → b → c、II : a → b の関係は明らかであるが<sup>(3)</sup>、I・II・III 各型式の前後関係はどうか。I a は、おそらく武生市深草廃寺出土の花弁中央に稜線をもち外区内側に圏線をめぐらす素弁八葉蓮華文軒丸瓦(図3)<sup>(4)</sup>の系譜と捉えてよいであろう。一方 II a は I b からの派生とも考えられるが、内区のみを見れば、百済末期様式<sup>(5)</sup>とも呼ばれ、奈良県法起寺や大阪府高井田廃寺などに代表される弁端円形形式<sup>(6)</sup>に属し、その成立を I 型式とは独立させて考えることも可能であろう。現存する軒丸瓦各型式の個体数を見ると(図4)、I b、II a・b が圧倒的の主体を占めている。I a は 2 個体しか確認されず、瓦範の使用期間はごく短期間であった公算が大きい。以上の諸点から、I a が II a に若干先行する可能性を残しつつも、I a・b と II a・b の両者は大虫廃寺創建期に併行して展開していったものと考えておきたい。

大虫廃寺の創建年代については、I a を深草廃寺との関連で捉えた場合、同廃寺創建以後であることはほぼ確実であろう。しかし、瓦当文様がいずれも畿内寺院出土の典型的なものに比べて相当の変異形で、またこれらの生産地の実態が全く不明であるため、軒丸瓦そのものからの実年代決定は極めて困難である。そこで、大虫廃寺出土の14種に及ぶ平瓦を見た場合、図5に示した2種の格子叩きの型式が圧倒的な主体を占めており<sup>(7)</sup>、軒丸瓦 I・II 型式に対応する瓦群と見做される。平瓦 K V 類の類例は、富山県小杉丸山遺跡1号窯跡で飛鳥 III 期<sup>(8)</sup>の須恵器と共に焼造された平瓦や、石川県黒瀬1号窯跡で奈良県紀寺出土のものに比較的近い紀寺式複弁八葉蓮華

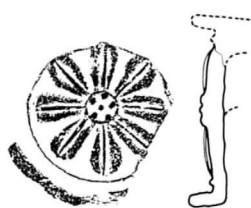


図3 深草廃寺出土 軒丸瓦 (1/6)

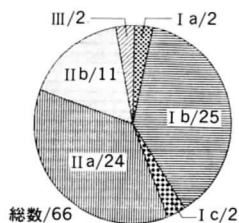


図4 軒丸瓦各型式の個体数

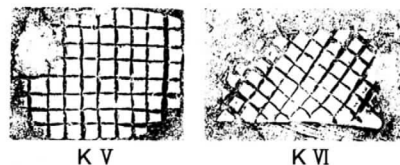


図5 大虫廃寺出土 平瓦叩き拓影(1/4)

文軒丸瓦に共伴した平瓦などに、一方 K VI 類に関しては、やや崩れた例ではあるが石川県宮地廃寺で複弁六葉蓮華文軒丸瓦に伴い主体的に出土する平瓦に求められる<sup>(9)</sup>。これらの諸例から見て、大虫廃寺平瓦 K V・VI 類の生産年代(≒創建年代)は、従来の須恵器・軒瓦等の編年観に依拠するならば<sup>(10)</sup>、670年代前後を上限とするのが穏当と思われる。軒丸瓦 III 型式については、これも明確な根拠は乏しいが 8 世紀中葉を遡るものではないであろう。

**軒丸瓦生産側からの視点** これまで、大虫廃寺創建直後の期間に、2 個の瓦範が改作されつつ使用されたことを明らかにした。それは、2~3 個の瓦範が比較的接近した時期に使用されている武生市野々宮廃寺や深草廃寺と比べても、その生産工房が、同規模・同質的な工人組織をもっていたと評価しうのではないだろうか。この想定は、軒丸瓦 I・II と見事な対応関係にある平瓦 2 型式の製作手法の均一性に見られるところの、個々の瓦製作者が道具を保有し、造瓦作業を首尾一貫して行うという該期の瓦生産工房の一般的あり方<sup>(11)</sup>とも関係してこよう。但し、大虫廃寺所用瓦生産工房が他と基本的に異なる点は、瓦当文様の創出が同一地域内で既に生産されていた瓦の模倣によったことであり<sup>(12)</sup>、II a → b の瓦範改作を機に工人自身も変わるという現象にも見られる如く、軒丸瓦工人の技術的未熟性を強く認めるのである。これは、とりもなおさず、生産工房の管掌者、ひいては大虫廃寺の造営主体者の性格が他の 2 廃寺と異なることを示しており、前述の工人組織の同質性とは異なる次元の差異を見出しうるのである。

最後に、やや微視的に見て注意された点にふれておく。軒丸瓦 I に見る b → c の改作と、II に見る a → b の改作は、一見すると同一原理に基いているように見える。ところが、前者が周縁途中までで終る瓦範から周縁をまわり込むタイプの瓦範(この方が整った形の周縁を形づくれる)へと指向しているのに対し、後者はあえて範の外縁をカットし、それまでと同様なタイプにしているのである。周縁をまわ

り込むタイプの瓦范は、近藤喬一氏の研究<sup>(13)</sup>によると、白鳳前期に見られだす傾向的な現象であり、このように指向性の発展的な瓦工と停滞的な瓦工が見られるという事象も、些細ではあるが技術史的には留意されるべき点ではないだろうか。

小稿を成すにあたり、水野和雄氏、武生市教育委員会の御協力を賜った。深甚の謝意を表したい。

(久保智康)

- 注(1) 斎藤嘉造『越前国分寺推定遺跡(大虫廃寺・深草廃寺発掘調査報告)』武生市教育委員会1967
- (2) 水野和雄・久保智康「資料編・福井県」(北陸古瓦研究会編『北陸の古代寺院—その源流と古瓦』桂書房1987)
- (3) 同様な観点で、軒瓦の先後関係を検討したものに、亀田修一「豊前国分寺造営に関して」(『森貞次郎博士古稀記念古

- 文化論集』1982)がある。
- (4) 前掲注(1)に同じ
- (5) 藤沢一夫「日鮮古代屋瓦の系譜」(『世界美術全集』2 角川書店1961)
- (6) 奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』東京美術1970
- (7) 平瓦分類の詳細は、前掲注(2)文献参照
- (8) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』1978。同書で、飛鳥Ⅲ期は7世紀第3四半期とされる。
- (9) これらの諸例は、前掲『北陸の古代寺院』各県資料編にまとめられている。
- (10) 白石太郎氏は、該期のこれらの実年代を20年前後下げる見解をとる。(「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』1 1982)
- (11) 五十川伸矢「古代瓦生産の復元」(『考古学メモワール』学生社1980)／木立雅朗「造瓦組織の発展についての覚書」(前掲『北陸の古代寺院』所収)
- (12) 但し、瓦の周縁部を切削して平縁とする点は、他地域からの技術的影響であろう。
- (13) 近藤喬一「瓦の范と瓦当」(『小林行雄博士古稀記念論文集考古学論考』平凡社1982)

# 収蔵資料紹介

## こんいとおいおとしどうまる 紺糸匂威胴丸 (表紙写真)

### 若狭小浜 酒井家伝来

兜は鉄錆(さび)地四十二間星兜の古作を用い、威は紺糸を匂威とした胴丸である。その製作は入念で、面頬(めんぼう)・喉輪(のどわ)・杏葉(ぎょうよう)・籠手(こて)・袖(そで)・脇当(わきあて)・佩楯(はいだて)・脛当(すねあて)を具足(ぐそく)し、鍬形台(くわだただい)、吹返(ふきかえし)、杏葉、手甲(てっこう)、脛当の

立挙(たてあげ)には、それぞれ剣酢漿草(けんかたばみ)の酒井家の家紋を据える。また面頬の頸に「津軽藩□明珍 紀宗行□」と銘を切る。

明珍家は鉄鍛えの優れた技術が歓迎され、江戸時代には全国に分布が広がる。この胴丸は津軽藩の明珍宗行が、江戸において酒井家の注文に応じたものであろう。江戸時代後期には復古調の甲冑が多く製作されており、その典型といえる。また保存状態が良好なことは、銘や伝来の資料的価値とともに、本資料を貴重なものになっている。(村野隆男)

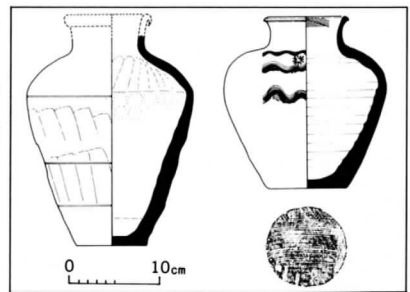
## さんさんこすずつぽ 越前三筋壺と珠洲壺

この二つの壺は、丸岡町赤坂九字石那田42番で、昭和20年頃開墾中出土したものを、昭和29年2月29日現地を踏査された斎藤 優氏が田中国盛・高本玉栄の両氏より譲り受けられたものであるが、昭和60年県立博物館に寄贈された資料である。

越前三筋壺は、口縁部と底部を欠くが、茶褐色の胴部に口縁部から底部にかけて灰釉が激しく流れておりみごとな景色となっている。胴部はへらで縦方向にナデており、その上を単線の沈線が三本めぐる。現高23.3cm、底径7.5~8.0cm、胴部最大径18.3cm。12世紀後~末葉頃のものの。

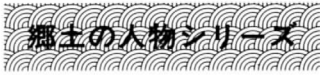
珠洲壺は、口縁部の1/3を欠く他は完全である。灰色を呈し、肩部から胴部にかけて三条の櫛描文がめぐり、上部の櫛描文の間には、陰花文が間を置いて

二つ刻まれている。口縁部は外湾し、その端部は面をなし、外側に肥厚する。安定感のあ



る土器である。器高19.1cm、底径8.8~9.1cm、胴部最大径17.8cm、復元口径 8.3cm。13世紀中~後葉のもの。

これらの土器は、通称墓堂(ハカンドウ)から出土していることから明らかなように、蔵骨器として利用されたものである。いずれの土器も、出土数が少なく、越前・珠洲の当時の商圈をうかがい知ることのできる資料として貴重である。(青木豊昭)



## 望月信亨

現在、仏教学や仏教史はもとより、日本史、東洋史、あるいは美術史を学ぶにあたって必ず一度は繰らねばならない辞書に、『望月仏教大辞典』があります。この索引・年表を入れて全7巻の大著は（現在は補遺を入れて10巻）、昭和12年に完成したのですが、今に至るまで最高の仏教辞典としてその価値は、増すことはあれ減ずることはありません。その仏教辞典の編さんの中心人物が、望月信亨です。

望月信亨は明治2年、今立郡村国村（現武生市村

国町）の農家の五男に生まれました。数え年十二の時に浄土宗の僧籍に入り、明治19年に京都・知恩院の浄土宗西部大学林、同21年に東京・芝増上寺の浄土宗学本校と勉学を重ね、宗学本校を卒業した後は、比叡山で天台学をも学び、明治32年に浄土宗高等学院の教授になりました。ところが浄土宗の宗政を批判した論文を発表したことにより教授を解任されます。その後、仏教大辞典の編纂にとりかかりました。この事業は実に30年後に完成することになるのですが、その間に、『大日本仏教全書』の発刊や、大正大学の発足にたずさわるといふ超人的な働きをみせます。大正大学学長、浄土宗管長、知恩院門跡を務めますが、何よりも生涯の論文数百編という偉大な学者でした。（長坂）

## ——ビデオライブラリーから——

### 自然の資源と私たち

福井県は豊かな自然に恵まれ、古くから、私達は自然の中から多くの恵みを得てきました。この番組では、特に、自然から得られる資源の中からいくつか紹介してみました。

1) 中竜鉱山 奥越の和泉村にある銅・鉛・亜鉛を採掘・選鉱している我国でも有数の鉱山です。映像では、抗道の先端の切羽で力強く活躍するジャンボといきいきと働く人々が描かれています。また、採掘された鉱石の破碎・摩砕・浮選など加工の過程を詳細に紹介しています。

2) 珪石 珪石は石英を主体とする岩石で、その成分はSiO<sub>2</sub>(二酸化珪素)がほとんどです。映像では、採掘から選鉱の過程を写し、さらに珪石のできかたを伝えています。

3) 笏谷石 笏谷石は、今から約1,500万年前に火山活動によって出来たもので、火山礫凝灰岩とよばれる岩石です。緑色の美しさと加工のしやすさから、古く古墳時代から利用されています。映像では、足羽山の地下深くで今も採掘されているようすを伝えています。

このほか、私達にとってかけがえのない、資源である水資源についても紹介しています。（東）

### 紙を漉く

チャップンチャップンと軽やかな水音をたてて笊桁を揺する—私たちの暮らしに欠かすことのできない紙は、こうした手作業によって一枚一枚漉かれてきたのです。

岡太川の清流が流れる今立町五箇地区（不老・大滝・岩本・新在家・定友）は、古くから和紙の産地として栄えてきました。越前奉書をはじめとして、五箇の紙は、時の権力者の保護と奨励を受けて発展してきました。江戸幕府の御用紙や福井藩の藩札、明治政府の太政官札に使用された歴史は、その技術の高さと品質のよさを物語っています。

近年は機械漉きが主流となっていますが、それでも昔ながらの手漉き技法を守っている人が多くいます。ビデオでは、昔ながらの生漉き奉書（楮100%の奉書紙）ができるまでの工程を追い、また打雲、飛雲、水玉、檀紙など越前和紙ならではの伝統技法も紹介しています。

手漉き和紙は温かい風合いをもち、優しく私たちの心をつつんでくれます。それは、自然の素材だけを使い、また、紙づくりに生きる人々の心が一枚一枚にこめられているからでしょう。（田中）

# 昭和62年度 友の会会員募集!!

**★特典**

博物館と友の会の事業が事前に案内されます。  
博物館常設展示を何度でも観覧できます。  
友の会誌「My ミュージアム」が送付されます。  
博物館広報誌「ふくいミュージアム」が送付されます。



「My ミュージアム」3号

**★会費**

- 大人 3,000円
- 大学生・高校生 2,000円
- 中学生・小学生(Jrサークル) 1,000円

**★期間**

昭和62年4月1日～昭和63年3月31日

**★61年度の事業内容**

- 5. 5 展示説明会「日本海のおいたち」
- 7. 20 学習会「むかしの教科書」
- 8. 24 見学会「やきもの・お城・博物館」
- ①愛知県陶磁資料館

②犬山城

③岐阜市歴史博物館

- 9. 1 「Myミュージアム」3号発行
- 10. 12 学習会「ふくいの大名たち」
- 11. 2 展示説明会「古鏡の美」
- 12. 21 学習会「絵巻の世界」
- 1. 18 博物館オリエンテーリング(Jrサークル)
- 2. 7 展示説明会「ふるさとの文化財～仏画～」
- 2. 22 学習会「福井まつり」
- 3. 1 「Myミュージアム」4号発行

**★62年度の事業計画(案)**

- 学習会(Jrサークル対象を含む) 数回
- 展示説明会(特別展) 数回
- 見学会(県外) 1回
- 見学会(県内) 1回
- 博物館オリエンテーリング 1回
- 「Myミュージアム」5. 6号の刊行

**★入会の方法は**

入会申込書(博物館にあります)にご記入のうえ、  
会費は次のいずれかで納入してください。  
○直接博物館内事務局へ納入(申込書を添え)  
○郵便局より振替で郵送(申込書は別送)  
○現金書留で郵送(申込書は同封)

口座振替

口座番号	金沢5-233779
口座名称	福井県立博物館友の会

☆入会の手続きが終了しますと、会員証をお渡しします。

ふくいミュージアム No.11 1987. 3. 1

編集 福井県立博物館  
発行 福井市大宮2丁目19-15  
〒910  
☎ 0776-22-4675(代)  
印刷 出口印刷株式会社